



中村俊定
文庫

早稲

中村俊定文庫
文庫 18
46
3



山之井 秋部

初秋

文月 けきろ帳

永田文庫

紙負集

きれお乃元にくる新文も
阿くねど吹風をひやりと
げさい方に志くれよぶれ
くろくし手定もたらしゆや
ひきこ家あつこも登寝
を志れ草れ鈴露も夕乃
虫れ巻を漸くさびしこの
かされきわときてふれ
桐を柳も一よりりよ
物にる池乃んんあを

=

手後定文庫

はらぬ。文月とりのくは
うらぶが等ぶてあどろ洞
をも踏ひ。又踏とりのまり
うへてもつり。立秋と
りも歌も。彼立長れんを
知あへし。あやまの通り
てもつひあせり

あびりたをれんあけま秋
んあきまへんあきまあき
風は此家の文月とりのくは

七月七日

あひのまありの
事半徴女お茶箱

かきまのくー けりま川

あひ久あひ 七切真 乳糸

握乃糸

今日いまが節供をしてせり
索餅を月ゆる事あり。
言れんセタムはりとして。
香爐りり。うらぶあきま
しに柱とまをく。庭り
まをのりいられ糸を竿よ
ひけて。福ぐひ乃糸とくは
とまひり。セつま鹽り
あまをいれて。大えあ早れ
ひくり残る。まをりあど
あまあとあり。お茶箱は

書をりりし。宮女も糸針
 糸針月ひわや。此姉のめ
 うびりくも。もらひいで
 まら。れら。ま。か
 につあはく。ま。あ。る
 事。あ。げ。て。り。え。う。ら
 されん。セ。夕まつゆふに。七書。り。く
 らん。と。も。あ。て。き。ひ
 らん。らん。あ。ら。る。ま。ら。う
 あ。も。り。り。こ。ひ。ひ。あ。ら
 つ。あ。ま。は。ら。る。あ。る。文。よ
 河東乃養人天帝此ひすあ
 ろく。ま。ま。乃。あ。を。あ。ら。よ

と。う。り。あ。ら。れ。と。あ。ら
 猶わく。ら。ら。に。あ。ら。こ。え
 於。あ。あ。帝。を。ま。ら。ら
 あ。ひ。く。河。西。乃。秦。牛。史
 に。嫁。あ。あ。あ。それ。ら。り
 織。女。あ。ら。ひ。け。つ。ひ。あ。ら
 ら。り。あ。ら。あ。ら。ら。ら。ら。ら
 力。と。な。り。て。ま。ら。ら。ら。ら
 とも。ら。ら。あ。ら。ら。ら。ら。ら
 え。ん。と。も。あ。ひ。う。ら。ら。天
 帝。又。ま。を。ら。ら。ら。ら。ら
 ろ。び。あ。ら。ら。帝。あ。め。あ。ら
 乃。あ。ら。ら。ら。ら。ら。ら。ら

とゆうしつはなう海く
 ありきさちられこよりひ。高鶴たかづる
 来て銀河ぎんがよよこいこさうり
 つく橋はしとあり。織女おりひめとつり
 志こころくわひもえしひあど
 竹たけく。とくしおひと花はなのわよ
 とるれん。花はなものかごり
 流星りゅうせい乃の較くらあもわまり。依よ
 れ恒とこハ何月なんげつ志こころ川がわ波なみりも
 かぐんたごらまごりあへ
 くりひるはへし。らく
 てもたごしきこりあれ
 月つきは仲人なこうどるまや宵よるの月つき。

まは男おとこあれやよごひや
 あどもしつり。又また素半すはん織おり
 女むすめ乃の名なにうへて。しはばめ
 志こころ見みれて何なにやも。うま
 きあくろてさりあど
 といひゆるらふこやこに
 井いれあをう人ひと祝いわいと何なにら
 ひ。花はなをきそく。星ほしよま向むか
 握にぎ乃の美みより。歌うたくもりあ
 とゆるら。花はな握にぎの葉はふりけり
 せんさう。あ。そよ。七夕せちせき
 乃の屏風びんぶ葉はあどやうに。
 それくれりまをほく

ねるひく

いふがうはま男のおもひが
七夕のあつしとておまが
かたはるにけ七夕のせんをう
七夕七えんおのれひとよまけ
うけつものよれとちおまが
こらひのうらぶとてと
がにわれく。いふ月を川
とあはぬうらとてうま
せむれとてや世借り
あつしせり。滅く。き
れ接い見ゆくねと。え
ちあひひてり。あひひ

えりもいづらんよは。桃
乃らひおろり。さひひ
ととつこあうらん

盃蘭盆

玉まつり 奉靈棚
三そりき 栴 甚れ飯

わけとうら まひとうら きちと
をうり火 施餓饑 けり
あきこむ乃きおれとりの
るりこまうり 教ぬ度何か
あしとまれと。とて七月は
うらわんまそく久く。お
のうへにともを甚れを
あひ。あまはうらひかへ

てとあつくりく乃持佛の
 あつくり。まじさ業枝豆根草
 あどおせきまてててて
 つり。核破子らるやう核の
 和瀬へて。身よりくれらるん
 ぞくくハさうさう。まてて
 きるるれ。そぞ縁法界
 にいさるさうて。あさくさ
 じゆく。されむあせぐま
 志くく火乃車れくけさも
 うらるん。んんん。そくく
 光り。に。く。や。これ地獄の
 まひ。あ。ん。と。ひ。や。

麻く。れ。杖。は。く。ん。う。あ
 りひ。姿。を。悲。く。こ。煙。の。影。を
 の。ど。とき。縁。饑。く。く。と。何
 られ。こ。又。蓮。葉。よ。が。り。め。く
 病。を。の。ろ。ん。人。む。り
 お。を。へ。わ。え。さ。を。ん。ま。さ。ら
 ち。あ。け。さ。を。あ。神。を。洞。り
 ち。あ。ん。て。あ。る。ま。さ。と。ら。よ
 ん。あ。と。す。ん。り
 西。月。に。ら。ら。さ。ま。つ。り。を。み。ぬ
 か。あ。あ。ら。わ。ら。び。あ。見。た。ま。つ。り。政。を
 躍。ハ。り。と。時。り。く。福。ど。
 本。学。躍。小。町。や。り。あ。ど。や。う

乃歎。秋の季もくくゆら
 とせ。あうくも小町こまち 眺ながま
 あれ。海とつひとわ
 来常こころ躍うらりハ義仲よしのぶあり
 あとやえつ

あいつま小町こまちやうせやう
 うは海うみふふと小町こまちやう
 中なかいぢるさんやもきをき躍うら
 かりつごうややんが

稲妻

いふづつら素すあうりうか
 りくとるうひ志こころ快た
 うひ志こころ快たの
 いうり ころす

あどいひき乃のたれも
 あとつひあれ

いあひひる海うみ民たみきがれ

草花

女部にょぶむ房むらかるや
 萩 萩 菊 桔梗

野色のいろ乃のむ軍ぐんとつひとく
 千種ちくさ中なかおま心こころきうくひひ残のこ
 ぶらへ。庭にわ乃の花はな壇だんハ秋あき好この
 中なか宮みやれけうそひあふ家け法ぽう
 んとわとれ三さん綿わたとつひて
 玉たま舟ふね娘むすめ乃の几帳きちょうまとうい
 うひをを甚ことつひてはう
 此こゝ床とこ乃のうりまきあど

いまのいふ又茶花とりて
 けしき。さびひとくらさうあ
 りともつらう。そと又何さ
 ゆみちるれくるこそるめ
 うくゆれがんきさう
 など梅のぐらきつこう
 ともさつことあを。徳
 作山人いりりそや。さ
 せとど茶む乃中のみす白
 とつらけんおひさのの底
 れとちひささつわらうら
 なる仙翁せんおう祀まつりけつとらう。
 志をた。とぐる海なまがら

ろふまうーつそとというそ
 かうん

若き新かぎて記落菊桔梗と花
 こまういともや萩の志を女ま茶同

女郎花
 ちる海りく、くわゆる
 さう野ー 中こ山

とこるへーい美人茶花ゆ
 つれなうーきたにとうして
 たくれきるからいにいひあ
 て。病をむむひていふれ
 かんさうすげまやう
 あいからめ。茂苑しげい野
 とそれをさうが過あやこしと

いひつけ大は山ふ志の
と鬼やうなひーとさう
ひれ風乃ちる残る留る
らわらハ女氣うともちり
あく男やまあわともひ
人よりかこるあともあれ
遍昭乃びりー名残やめて
借をさちきると作る。
眠るいー人をあひはく
けて倍いあなひ出あを
つるあともいり

いりき残るの女氣の女帝を

女帝むりりあやこやあや
粟飯とまがうとも女帝を
倍らへい出あやうともあ
はくさ我軒へうらやあは
萩うう 下にぎ 萩の聲
萩の上風 新澤のたま
りせ乃とあたま

萩の風りうう入くあれ
何るれぐ萩風の口あね定
宿あうともいひ。うらひあ
あうやまきあもきうら
又かさあに萩やさうら
萩風の地うらひあともいひ

山並紫雲のすもも花の如し
あつりける日よ夜よ

後きやうすもも花の如し

萩 萩の葉 萩の花 萩の葉 萩の花

萩の葉 萩の花

萩の葉 萩の花

萩の葉 萩の花

萩の葉 萩の花

萩の葉 萩の花

萩の葉 萩の花

萩の葉 萩の花

萩の葉 萩の花

萩の葉 萩の花

萩の葉 萩の花

萩の葉 萩の花

萩の葉 萩の花

萩の葉 萩の花

萩の葉 萩の花

萩の葉 萩の花

山井三
こぞが都も風がらうけの若葉
花より見や傍の木の葉りて露

桔梗 ききょう

桔梗花とよりよけれも花
乃顔くせとて人目思
ぬのまづくれもるふと
ひあゝかめおらあてい
亀甲とりの首速といふ
阿のうらゝぬまあぢも
りりうえまにわらうら
そとつゝあふん
野もれ錦とてまきもれ長音

薔薇 ばい

かるるも乃園より名葉
あふしとてよせなる坊
うらづよるうらうら
うらうらとてよひみるわ
とらふもつあて病の病
かふとてあはらうら
あふとあぢもひあし
かるもなあふなるあふ
蘭 らん
らんらんらんらん
らんらんらんらんらん
らんらんらんらんらん

て。薄どのの陰けくさ。う
 わきうとらひ。おらむり
 鳴きよ。芝葉とひのころ。海
 うとらう。うぐひ。まら。もく
 たらう。河をも。結。う。ありを
 めづる。う。な。と。ら。お。か。神。香。が。
 うらやう。ま。れ。か。け。う。う。あ
 ど。と。り。ひ。葉。香。待。を。も
 う。へ。て。い。ひ。ゆ。る。又。ま。ら。の
 らん。さ。く。れ。葉。村。り。か。く
 れ。一。ん。ご。ん。も。う。あ。る。丸。う
 修。り。よ。せ。り。一。ち。ら。む。う。海
 と。と。り。ひ。あ。一。ゆ。る

きり。沈。と。の。へ。は。け。む。葉。香。待。の。葉
 秋。の。野。さ。ら。ぬ。書。き。く。ま。ん。水。葉

朝顔 牽牛花

何さぐわハ散り一たうりて。
 露乃くうまれあると。えらがと
 りひあ一。志がめらるるとひ
 さいれ志ととととんあせり。
 お乃やきれあにうりて。何
 ぶやうあ。ね。な。れ。の。あ。ら。う
 と。と。と。又。秋。の。の。あ。と。と。よ
 分。牽。牛。花。や。り。よ。り
 つ。あ。て。の。れ。の。す。く。れ。き

勢ぞもやひ。又日親とま
さぬらうりに。病ちのあはれと
乃かたゆるやどとんられ
こ。わびるふいせれきとん
あまに

何さかたにまわる病のまを
病飛や。病とねぐるもの親
志わると。日と親のつるせ。疾

病 病家 病 病 病 病
とく 病よ

やうー。病にまると。病り
乃。老りう。病。う。う。い。
親。き。ま。り。い。と。ん。乳。残

如。意。病。と。い。ひ。き。と。て。月。を
や。ど。う。て。い。ら。ま。と。病。と
ん。あ。ー。や。ま。に。ひ。う。る。残。
う。ん。ま。あ。と。と。い。ひ。た。あ。は。
又。う。ひ。き。あ。い。花。檀。り。
あ。あ。あ。あ。り。ふ。と。や。し。が。た。
又。あ。あ。あ。あ。り。あ。あ。あ。あ。
子。親。を。何。や。ー。こ。れ。と。あ。
乃。病。を。と。れ。病。り。せん
ぐ。り。れ。世。を。あ。ひ。そ。と。あ。乃
風。の。あ。と。ま。う。う。あ。病。の
男。を。と。う。あ。い。ん。あ。と
とん

ぬのちかぬしきり家や丸はり

かゝる者其家いせ海にむづりかき

悉乃百韻あり

秋津別いふなすけとつ許の家集

寄

わさ寄夕寄川霧 落寄

うき霧 八重寄 寄くらん

霧のうき

寄名下 くら

こしらへる くら くら

籠

寄はらりぐ ぬる海にむづり

く。海も色ハ入るすすし波

乃きれもむづらあくら

こ。深きハこども急もかく

中そ。急もくらりむづらんご

とけらりけり海をばら

ぬ。寄れ海とくしてら世界

乃ものハ人勇とひひ。お乃

そ。うもけりかといひ

るんらん人。於寄名下と

いひく。い本の紫とんぐ

をひひやり。夕寄とくし

ハそ井の底乃何よん登

とくも。お乃うし。いりり海

あがも

立はらぐ。寄や。天宮海流

旁の海に世界初の八人乗り

山く波のうらりり音の海を

鹿 きりりきりり すく

きんぐらと 兼 節に

つまこふ ひらり こ 萩

とら山 かすり 兼 野

兼 節といひける程の

ついとやうな様

とよら野 か らう

きく 念 に 萩のむづ

らぬり と ち こ お

らぬ き ち を た

もふ と ち を た

乃ひのれ ち と あ ち

き 兼 あ ら こ に あ ら

牛 ら ぬ き ち の ち

猫 し ぬ ち ぬ ち ぬ

書 と ち の ち を ち

く ぬ ち あ ち す ち

ひ と ち の ち を ち

兼 の ち を ち を ち

や ち ち す ち

あ ち ち の ち を ち

探 ち ち を ち

ち の ち を ち を ち

雁 初居 孫居 三はくり

見舟の居 きのひも居 旅居 落居 群居 海居 白居

むつさ 文 竿 帯 石 糸

りくつろつろ居 登をたある 沢色 平海 とこよ ころり

見乃 登よつろあるぞつあ 帯とともあし。月 氣り

ひりりろ居ぞ。ろく此 帯 とひひ。海居ろり ゆく 城。

ろあれ竿といひろそ登 を知に上る城。あさかあし

いひるん。ろれ 籾 長がこ 登

けくろり。居たたまづこ

とひとひてよこ 竹居こ 文月乃元にとひりける

とも。うちづもりにちろ ーかくともらひ。又月

ゆころをろとぶと 矢文 よろとろ。ぐひ。もろりれ

海つろ居をたがもすさ ひがと。あや。むやうの

ろろ人。かりりみろはろく ありろと。きろる文字り

とひあ。これ。林凡字 ろろ字あ。もろひあ。

天門よりかきし 顔くし
 りくそそ。平ゆららしくかき
 ともともいひつづけりゆる
 文月かきしるるるはははは
 夕暮よきおはるやあまの夕
 夕暮にを井此のちやあまの
 ちかかきしひみく骨のるるる
 とまのや歌を歌いどやう文字
 月のあまのけりいんさくそは
 かりがね秋風あまのけりかま
 飛ゆるるるるるるるるるる
 新らくともなげらるるるるる
 橋あまのけりいんさくそは

白府と世の上の人かえそく非 希安

八相 白霧のこの...

ろふハこのことそせり
 ハ集あどくがりかり
 けるとくやいまるる世も
 あやういあまはまがまは
 むんか心ととにハれをを
 あ〜ハ相續とくくさ
 ぐるるるるるる

月 五明いさあま さちあま
 わちらねあち ち〜あち

くら月 かり月 月 月
 くら月 月 月 月
 月の鏡 月の香 月れうま
 月の都 月志極 月入芳
 月れうまき 月れうま 半月
 月の端 月の笠 くら月
 七夜あら廿日あう廿三夜あう
 出るりる かりるく よあられ
 ひうり 夕 夕 夕
 さやうちやけき 夕 夕
 くら 夕 夕 夕
 月宮天 四王天 文級 みたす
 田くら月 一りり 唐沢

この月乃きしんめる氣を
 西方よ健生操ととも場列
 腰あどもとひあ 山歌
 乃こゆひ志が じもえ
 の海れつりなることと見え
 とせ 膏乃あが 夕
 依ん城ひるあて 夕
 ける海やうあさひるらね
 てあひあどもひあどもとい
 たり。六日やうらうら
 志此は月のあねといひて
 あまあさえりあるともあ
 鳥籠の橋れあうしゆく

とくもつひくそし。とらり月
 の影よむらむてふ。天女れ
 びんぐことと。山姫ひらも
 姿すがた見とくと。あし。ま明
 乃老りさ。あづらつあま
 うん。うひの影とさくばき
 とつひくげ。又あるびさ
 まるると。びうあどもひ
 あせり。月つぎの影かげさし。何
 めるる。あれく。あわく
 ハ餅もちをさくくす。さし
 うせ。又かつ。の影かげさし。さ
 らひくこと。つひくす。

うとく。うふ。影かげさし。さ
 あどき。さし。あ。あ。あ。あ。
 く。れ。あ。あ。あ。あ。あ。
 あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。
 乃海あさく。げ。あ。あ。
 色いろひ。あ。あ。あ。あ。あ。
 と。あ。あ。あ。あ。あ。あ。
 め。あ。あ。あ。あ。あ。あ。
 帯おび子こに。も。あ。あ。あ。あ。
 乃月。あ。あ。あ。あ。あ。
 ん。あ。あ。あ。あ。あ。あ。
 へ。海うみ川がはと。こ。あ。あ。あ。
 野の山やまも。あ。あ。あ。あ。あ。

ありけくおづたらるる月れ航
 此目と縁の道一月の航
 せよとておのち月れおびく
 月のひをそふもあつらん
 是に目、隠れんがらあつらん
 こらひあせらうわら月も麻きり
 りらあつらん月の海とてふ
 十五夜よあつらん
 夕やけの無き月もあつらん
 月いふあつらん月もあつらん
 十五夜月の影を今もあつらん
 世の目もあつらん月もあつらん
 めとあつらん月もあつらん

の月とてあつらん月もあつらん

八月十三夜よあつらん

くれん

あつらん月もあつらん月もあつらん

八月十三夜よあつらん

あつらん月もあつらん月もあつらん

八月十三夜よあつらん

あつらん月もあつらん月もあつらん

八月十三夜よあつらん

あつらん月もあつらん月もあつらん

八月十三夜よあつらん

あつらん月もあつらん月もあつらん

八月十三夜よあつらん

彼らよがしれ衆の魂も
 心ひ出て世を去り
 泪がまればゆるしあはれ
 此よれ清明さうし月
 色にうつるやすきま
 らんと

十又衆と坊の妙なる徳の月同
 中朔の月平れ住ぬ
 所ハ後^{カキヤシ}禪と志出乃ひん
 しくにつくろる尾なり
 月見乃朽と名付てと
 一村作り

格よむしや月も三又衆中朔の月同

何るてらりし後の名月
 月とこよひ十三^ガ佛乃いり中同
 終る板のまの者がかそへん梅の月 正秀
 月の影ながるやまの村かへ 屋信
 志くがきとにへ月見り
 ちうりて

こよひと交りぬる月やまの各衆
 九月十三日より一月廿三
 日迄の月

多てゆぬる衆をよびて同
 いのちのふ又の道ぞうの月 同
 空月乃親と名にりく
 他なる邦と心合せく

後よほるるや又三三集すの月之圃
 ちとせんにいそあやうなる月夜集
 かきつらうらひのちや明月記の巻
 十又集うらひの月のまじりて
 幾つあつかはれ月やえんう一踏雪
 ともほる月をえんて

雪月ゆく月たもくろ面印也 真直

小園にて

月星やふたのちとれ波のえん可住
 着也連袂乃海坐り
 初きえよ月と世にあらはれ ヤト
 秋如堂よりそしうら
 乃月と

月やこらひ十九かあ乃新し一酒
 かこくにならづえとそ月の瓶常倫
 月乃極くは月中より一又百
 又ち本何り。そまれり
 に入わり。性ハ吳名ハ剛。是
 を月人男とくも極男とも
 いひゆとせ。月乃極とてな。
 月を 月乃 玉蟾言とてと云て。
 かなる乃玉とていんちりり。
 月中心 心 危とてハ白兔とていふ
 小付てあふん。月の扇
 といふ。そとあふん
 うらぬくあふんうらぬ

あつがひてらんがかる事
あどつたうらんどのみ、辨あま

八所御霊祭

上座アヤウ
下座アヤウ

八月十日八所御霊祭にて
治やこあど、何やうさつら
アしゆら津まもとかこ御冥
まなほらるぶひこのやうく
しきかひて、それごと
あるがさあつらゆらる事。
祭乃まうらんの、まうら
らねとらひくわそれゆら
まねとそあつら、それゆら

中女祭

下京に一所いまはゆり
つとめゆらる中女えいご桃とく
名とえは、桃とく、ゆり
ゆらるるゆりとせ

神あつら、ゆらゆら中女桃えいごとく

接衣

碓屋うすやゆら、まこあゆら
あやまきあやまき植

風乃させひてきあつら
あなをまらゆら、あつら
あひやり、あつら、あつら
ららやうらあつら、あつら

夏乃つらうがかるるをた
 志まかろくころとけれ唐
 衣の音をうへ志く登り
 ひびく白絹きよをひきまきく。
 於るといふりりりりて。
 初尾乃流り拍子まわ入
 びやうしあどらひてお戻
 乃うへんそもひひし
 竹ら

たぐかおえらるるつら
 山青やきあゝ風たれ拍子ひき
 礎を探歌ましくりて
 うらねるきあゝおわつてお同

虫

しをえぬ松音 松り
 響り みるくは 虫り
 らんざり ころまき 竹娘
 こころをいさこいも虫 虫り
 ぬるき虫 虫りり籠すく
 ようつらんくくくらんらん
 つつとせ 虫ま

虫を撰えらふは人きち
 暖縁ぬる野のまじりに道遠ちとほ
 清く。虫をねて籠かごよられて。
 大周おほしゅうにまのつとせゆ
 とせいおれ世よとかな侍さむらい
 なるこころのこころと

めくくそしまつりゆふさ
 せだむりくくゆふれ
 山乃べのくきとほ
 けりくわんどうれが
 りとぞぐく乃置もこどく
 志うあゆりと海文をせも
 が象を命うくすまこふ
 らへこれゆく秋を母
 あふする乃べれゆふれさ
 ともりい湯よりせて
 登ハあやうぬとも又沈
 りてふ萩が筒あやり
 かくともうこひ松り

ハ松よたたりてせんごい
 ふりくぬねりりせめぐ
 又人まのしりともへても
 けりれ弱つあま乃壺雲
 乃香をきくあんぎさう
 むよらうさるしり
 めこれりかして
 坂中よりへれぬくつきを
 玉舌指乃ゆひとあや
 とゆふれと壁乃ら
 をつづつとせとけり
 慥粹乃音りしひこれ
 ひれあや鬼をこひく

らうとよぶとさうし
おやちのうぐさむけか
りりゝ海いぢぢりれさ
らととがひるらあどつ
ねゆるへー

かこゝにふねどつらむの夢
約つあきまはひるくや徳玉
鈴虫、鈴虫にまきあふりふさ丸
相とちやゆひりりぢく守業
人あつていこ

虫鳴きとらひあふらふ

色鳥

おら軍かひい
こらうかひ多 ちのり

ひえち ひじ ひまひ あり
ひくち 菊つてき ぼくこ
巧のち 小鳥編く 庭菊
にらり えさー てん乃わ
ちあひ ちせー

秋乃野山りりりりて。
しくちあえのこをりり
そひかゝちあんとんぐり
ちのりちえを拾ふ
ひえちあやぐー。ああん
らうあゝんああちを
ひいさてい。又山ぐら
娘ぐらをばたてあひ。

けづらひのぢもくーに
 ぞーづひもあどもつ
 ねねやえそを海づらひ
 きの心を感し。きり
 見えぬひぐらをたられ
 こ。けらあうーそははぐこ
 ねづらひもあひあひ
 くらふあどもひあひ
 軍かきも海どお山踏
 軍かきも海どお山踏

鶉

鶉かきうらうら
 うらうらこ うらうかこ
 鶉合鶉衣 うらう系 うらうら
 うらうまれ ちちう まのうらに

うら系

うづら尾乃こころか
 名もれん二聲ハ何中りか
 とあしーととがハあひ
 ちりーとあひーともひ
 りーとあひとたうとあひ
 父あと乳にもろく文う
 ーああ。あもあひ
 ああもひひひうらう
 ぐさとりあひくハあひ
 うらううらうらうら
 うづらまれーてあひ
 うらううらあひたうら

ひと登ふ初まりかみお鶴水
かみおつてきりし志あふ鶴水

山志き 姥鶴 川系鴨

鴨 ころつき 鴨のえきり

志きしつらみ

朝にとまるかろく鴨とと

かめ姥鴨乃たおあつらめ

と志きいふらきしし志きと

志があどろへても

やんごろかおれとと

まて志き志きとと

ころあにころびりれと

と志あひかえ入れ者^{ころか}水

鴨

鴨のまきと 仁とり 鴨の

鴨ハめとあひしてころりり

うけておろし鴨をたおし

何れれ自あどられ登た

けくともととすとくろく

かつるあどととあし約

登たも鶴もころひの志登を登

とすとくろく登る二志かお正美

紅葉

初紅葉 すすもみら

やーかの紅葉 下紅葉

村紅葉 ころみら ころきれ紅葉

梅栲栲 ころし わんて

昔の楓と葉お葉のまゝお葉れが
 お葉の土家 乱の柱 ぐく
 うむら ありらる 久あうらる
 山形津 高野敷 わく 立田
 高尾 通天橋
とくしの常盤山乃乃の何ふを松を
 時ぬれをありまわしうこ
 がひよらのの森うてくは葉
 うむらつけかとおや
 又山乃をぬれお葉うて赤人
 赤人乃にをせ梅のこぼる
 かのぐく何ふお葉人ぬれ
 ありひあし 又梅がえ

乃んまこつるふそのが酢残
 さんをにくといひ梅のお葉
 ハ又花をやるあといふ
 なるをまべし すべて万本
 乃又何ふを物よつあて
 あしきとくと何ともいひ
 あしあふがらうりお葉
 とつんざれともお葉
 ありゆくれ
 う何れにあせてお葉お葉
 下口上にお葉お葉
 紅葉して又をとお葉
 源氏酒よあひてお葉

若くはあてねのいるふ葉の節
 ぬ紫する山一きふきふ
舞舞舞字記上言ふるや柳お葉を花
 ひえ乃やまより乃ぼり
 竹一耐ひくれびりり
 お葉のちりけいさるゆて
 虫風やお葉おつく火のき舞ま雲
 ちあゆる葉のふや下舞の葉を
 又葉とつふとあめ
 月せつるあふるやとらふ
 にいんともちりあふさ日
 くれうとあふとてさ
 ひ乃ち人よひひちりゆ

葉のまのれがあふさんらほは
 松やまがふこをそるるは
 七葉のあていそいらは
 人のこととらりかあうら
 とらふ葉を鎖一ふ
 いあこまひるる風ぞかあぐらま
 秋のいひえ乃山れ葉よて
 見何びふ又あやすせもい
 楓はいちとひひゆらでも
 葉子よせゆらまにとらひ
 てらるる葉をばは戸んらま
 みいろげく強つまへにあ
 とらり。未冬んり風の

らんぞとひひをかくて
あといひる人をもゆる

よれらるる家へ人の風の楓が

九月九日

重陽 高 菜蓴袋

菊酒 菊の 菊酌

去る菊 かく菊 玉のしる菊

うら菊 金菊 猩々 大白 楊梅 妃

おれ菊 菊合 菊のこころ 菊の涙

菊島 星又 菊のうらむとあむ

おれよふらふあふさき十六重

山海 香 霜 菊 岩 南山

くハ節日るれハあやうら
うは菊花ハ菊とこあられ

てこここころ上達部 ぬらん

はくり 符款をつねあひ

又南殿乃所帳れた石り

菱菱袋をうけ 菊籠をを

くく 燈式あといゆるあひ

らん 町 方の人あぬりも

そま方んうりあぢくへん

すくとり乃口あといり

菊とほくそ月ひゆる菊に

かてくふ切株行るか意を

か山踏乃菊れあよ鈴をねん

あふるり 費長房

あふるりかこねとちのまてん

あうらききりりむむ菊志酒
下口もらせよあどいりふ
ふとりひゆる。又りしあど
いりし。園ともしひに程々
乃さふさふれあまはぢの
いれさるるさきさきで。
ありひともさくさるん
んあどさきさきとさし
ゆ。

仙人乃世界さ菊ははのさ
病さひんよさきこれ坪の肉
あせほ菊乃白ひれあせこ
はひ社のうらひのあさ菊の家

菊酒乃下口と上只測測

重陽の日

はとさきあまのりてうらな福喜海花

菊乃九句と志ゆ

ゆどさへあまのりの菊池ちや
あもさくゆさく此帯ちう供路わ正式
花の波にお風さよわ菊測良保
さささるささささささささ
かさ菊もらうり秋津にたら屋信
ふ又及祖神とて。あささ
はちのらふささささささ
ゆして禁中他国に事言を
とあさるよあささささささ

あしつ海りくさりりんちあは

九月盡

秋の暮 かづゆ ゆくゆく

あき乃これに世とらんくみ重
りくとも夢志いかなやれ
あきもえりくごうりしと見
こん座なる女は心いを振ふく
が城つこくま まがさ り乃これ
いけみ 新業のらなくかーらとえ
くさくさ い りてはくしゆく
秋のふれを母しこく人れ
くさくさとあにのまわり

きいんあくとし

あねあしあはらひきうんあはれ

